憂愁の妃将軍

デルフィニア戦記10

茅田砂胡

中央公論新社

C NOVELS Fantasia

目次の操作方法について
・表示させたい部分にカーソルを近づけると手の形に変わります。ここでクリックすると、該当の頁までジャンプさせることができます。

カバーイラスト
口絵　沖　麻実也
挿画
カバーデザイン　しいばみつお（伸童舎）
タイトルロゴ・マークデザイン　水野デザインルーム
カット　斎藤由加

目　次

1 ——— 9
2 ——— 37
3 ——— 55
4 ——— 72
5 ——— 98
6 ——— 114
7 ——— 129
8 ——— 153
9 ——— 165
10 ——— 195
11 ——— 212
12 ——— 226
あとがき ——— 239

アランナ◉ナシアスの妹。
ジル◉タウ屈指の大頭目。イヴンを高く評価している。
マーカス◉タウの頭目。
パジャン◉タウの頭目。
ブルーワント◉サヴォア一族の実力者。
モントン◉サヴォア一族の重鎮。
ブルクス◉宰相。デルフィニアの裏も表も知りつくしている。
カリン◉女官長。ウォルを暗殺の危機から救った。
カーサ◉サヴォア公爵家執事。
アスティン◉ティレドン騎士団副団長。
ドゥルーワ◉先代デルフィニア国王。
アエラ◉ドゥルーワの妹。サヴォア公爵家に嫁ぐ。バルロの母。
ゾラタス◉タンガ国王。
ナジェック◉タンガ皇太子。
オーロン◉パラスト国王。
ヴァンツァー◉ファロット一族。
グライア◉ロアで黒主と呼ばれていた野生の悍馬。リィの騎乗を許す。

CAST

ウォル（ウォル・グリーク・ロウ・デルフィン）◉デルフィニア国王。庶子であったため、一度はその地位を奪われるも多くの味方を得て再び王冠を被る。統率力に優れ、無私公正。戦士としても優秀。

リィ（グリンディエタ・ラーデン）◉異世界から来た少女。華奢で可憐な外見とは裏腹に無双の剣の腕と戦士の魂を持つ。ウォルの王権奪回に類を見ない活躍を示し、戦女神として讃えられる。後にウォルと結婚、デルフィニア王妃となる。

バルロ◉国内の名門サヴォア一族の当主で、公爵。ティレドン騎士団長。ウォルの徒弟で毒舌家。ウォルのことを早くから国王と支持した。

イヴン◉独立騎兵隊長、兼親衛隊長。ウォルの幼なじみ。タウの自由民。

ナシアス◉ラモナ騎士団長。バルロの友人。

シェラ◉リィ付きの女官。実は少年。元・特殊技能集団ファロットの一員。

ドラ◉将軍。名馬の産地として名高いロアに領地を持つ伯爵。ウォルの養父フェルナン伯爵の親友だった。

シャーミアン◉ドラの嫡子。女騎士。

ロザモンド◉ベルミンスター公爵家当主。

エンドーヴァー（ラティーナ・ペス）◉子爵夫人。ウォルの元・愛妾。

大華三国図
タンガ
スージャ
パラスト
ウィンザ
エヴリーゴ
ロア
アヴィヨン
デルフィニア
ミンス
ロシェの街道
ブラシア
ピルグナ
ギルツィ山脈
モザイ
コーラル
ボートナム
シッサス
マレバ
ベンタス

憂愁の妃将軍

デルフィニア戦記10

A RECORD OF THE Delfinian War

1

「縄を解き参らせよ」
と、グラハム卿は言った。
わざわざ玄関まで出向いて、捕らえられたラモナ騎士団長を見て発した言葉である。
彼らは団長から小者まで縛されたまま、屋敷まで引き立てられてきたのだ。
さすがにここまで来るとラモナ騎士団長は涼しく覚悟を決めていた。憎い敵を前にしても取り乱しはしない。
「ラモナ騎士団長。ようこそ参られた。余儀ない事情から貴君とわしは敵味方に別れたが、客人として歓待しよう。貴君の部下達も正しく取り扱うことを約束する」
言葉通り、ナシアスの縄はすぐに解かれた。
「卿の温情に感謝します」
丁重に礼を述べた。
口調も表情も平静そのものである。敗者の屈辱はおろか、卿に対する何の感情も窺えない。
それでも、卿は何かを感じたのか、寛容な態度で頷いた。
「貴君はさぞ、わしの行為を非難されているだろう。無理もない。国王に弓を引くなど言語道断の所行だ。しかし、これだけは申し上げておく。このグラハム、決して逆賊になった覚えはない」
ナシアスの唇に皮肉めいた微笑が浮かんだ。
おかしなことを言う。国王に反旗を翻したのなら立派な逆賊である。そう言い返そうとしたとき、

背後で騒ぎが起きた。
　引き立てられてきた団員達はナシアスのようには簡単には縄を解かれなかった。自由を取り戻す前に体をさぐられ、ありゆる金物を取り上げられた。
　うち一人の小者が頭を布で覆っていたので、顔を改めようとして、これを剝がしたところ、長い髪がさっと流れ落ちたのだ。
「何だ⁉」
「女だぞ！」
「どうして女が騎士団に……」
　卿の兵士はもちろん、一緒にいた騎士達も驚きを隠せないでいる。
　ナシアスは振り返って声を掛けた。
「それは少年だ。私の身の回りの世話をさせている。こちらへ……」
　卿も眼で合図をし、シェラは縛られたまま連れてこられた。
「ご温情に甘えてお願いします。この者は私の側に置いておきたいのですが……」
「それはかまわぬが、しかし……」
　卿は訝しげな眼でシェラを眺めている。
　騎士団の者とも思えぬ粗末な身なりだが、篝火に浮かび上がる顔も姿も少女と見紛うほど美しい。おまけに腰までの銀髪である。
「騎士団の小者にしてはずいぶんと異様な風体だが、これはビルグナの風習か？」
　もっともな疑問だが、ナシアスは少しも慌てずにシェラの縄を切ってやり、嫣然と微笑んでみせた。
「グラハム卿。野暮は申されますな。戦が長引けば、こうした者は自然、必要になりましょう」
「うお……いや、これは」
　卿のいかつい顔に決まり悪そうな笑いが広がる。
　ややあって豪快に笑い出した。
「これは失敬した。ラモナ騎士団長も男であったな。しかし、寵童に髪まで長くさせるとは恐れ入った」
「この子は特別です。よく似合いますのでね」

ナシアスは笑って、シェラの銀髪に指を絡めた。
ぬけぬけと言い放ち、当然のように慣れた仕草で触れてくるラモナ騎士団長の行動に一番驚いたのは当のシェラである。しかし、黙って芝居を合わせた。
無遠慮な卿の目線を避けるようにして眼を伏せ、頬を染めて恥じらってみせる。
その風情に卿はいたく興味を引かれたようだった。
「ふむ……、なるほど、騎士団の寵童とはこうしたものなのか」
硬骨の人柄でも、色の道はまた別物らしい。じろじろとシェラの姿を眺め、その美しさに感に堪えぬ様子で、こんな事を言った。
「ナシアスどのの持ち物でなければ、譲ってくれと申し出るところだが、そうも参らぬだろうな」
「これは気弱なことをおっしゃる。勝者には略奪の権利がございます。我らの名誉も、命も、持ち物のすべてに至るまで、卿の掌中に収められております。私のこの子への未練など問わず、どうぞご遠慮なく奪い取ればよろしゅうございましょう」
顔はあくまでにこやかに、ずばりと言ってのける。
身の置き場のない様子をつくって眼を伏せていたシェラは、その表情の陰でそっと笑いを噛み殺した。
この人もだいぶ親友の影響を受けているらしいと思ったのだ。
「いや、先程も申し上げた。貴君はわしの捕虜ではなく、客人だ。そのつもりでいてもらいたい。さあ、こちらへ……」
長すぎた戸外での立ち話を終えて、グラハム卿はナシアスとその寵童を母屋へ招き入れた。
他の団員達は別棟である。
しかし、この一幕を目撃した団員達が驚きに眼と耳を疑っていたのは言うまでもない。
自分たちの指揮官は寵童など持ったことはないし、あの少年は王妃の従者のはずである。
それでも、さすがは最後までナシアスの供をする人々だ。何か考えがあるのだろうと察して、余計な

ことは言わず、顔にも出さなかった。
一人、唖然としていたのは若いジョシュアである。
どういうことなのかという驚愕の叫びが喉元まで出かかっていた。
彼はシェラを知っている。
『侍女』として西離宮で働くシェラを確かに見ている。今まで少年の姿でいたから気づかなかったが、あの髪は見紛いようがない。
美しい娘だと思っていた。他の娘達が怯えて逃げ出す離宮勤めをよくこなしていると感心もしていた。
ところが団長はその侍女を少年だという。
いや、違う。団長が正しい。ついさっき、自分を抱きすくめた腕の力も衣服越しに感じた体の感触も、間違いなく少年のものだった。
ということは、王妃の傍に女装した少年が仕えていることになってしまう。
しかもだ。それを団長も知っていることになる。
頻繁に西離宮に顔を出しているナシアスが気づかないわけがない。知っていてかばったのだ。
二十歳そこそこのジョシュアの脳裏をこれだけの事実と状況判断が一瞬でよぎった。
問題はそこから先である。
ジョシュアを襲ったのはまず驚愕、ついで困惑、最後が王妃に対する猛烈な怒りだった。
どんなに男勝りでも王妃は女性である。その傍に娘に化けた美少年が何食わぬ顔で仕えているとなれば、どうしても色めいた想像と切り離せなくなる。
これは国王に対する裏切りだと思った。
いくら王妃が現在の国王の地位を確立するために非常な貢献をしてきたとしても、いくら国王が王妃に甘く、好き勝手を許しているとしても、していいことと悪いことがあるはずだ。
そうした思いが思わず口をついて出そうになったジョシュアの肩に、大きな手が重く置かれる。
ガレンスだった。
反射的に顔を上げたジョシュアを見下ろして、巨

漢の副騎士団長は、かすかに首を振ってみせた。
豪戦士と呼ばれ、不死身とさえ言われているガレンスの身体は今、傷だらけだった。そのほとんどはナシアスをかばって受けたものだ。
ガレンスや他の負傷者は手当を受けて、騎士団の残党は居心地のいい部屋と温かい食事をあてがわれ、さすがに一息ついた。
一昨日の夜以来、熱いものなど誰も口にしていなかったからだ。
どんな状況にあろうと腹は減るし、食わなければ人は生きていけないのである。裏切り者への憤(いきどお)りも敗戦の屈辱もひとまず置いて、腹を満たすことに専念し始めたが、ジョシュアだけは浮かない顔をして、手をつけようとしなかった。
「無理にでも食っておけ。それも務めのうちだぞ」
ガレンスがそんなジョシュアに声を掛ける。
傷の多さと深さに医師を絶句させ、どうして動いていられるのかと震撼(しんかん)もさせた副騎士団長は黙々と手を動かし、食べ物を口へ運んでいる。
ジョシュアはたまりかねて顔を上げた。
「ガレンスさま。あの少年は……」
「言うな」
短く答えて鳥のもも肉にかぶりついた。なにしろ傷は食って寝て治すと日頃から豪語している人だ。
その言葉を実践すべく、また待遇の良さも手伝い、豪快なまでの食べっぷりで皿を空(から)にしている。
「つまらんことを気に病(や)む暇があったら、とっとと食え。体力の維持は捕虜となった場合の最優先事項だと教えたはずだ」
ジョシュアはますます顔つきを固くする。本当につまらないことなのだろうか。国王は味方と思っていた人々に裏切られたばかりではなく、王妃にまで裏切られたのだ。臣下の一人として、捕虜となった国王のために憤るべきではないのか。
自分も囚われの身であることをすっかり忘れて、ジョシュアは少年らしい義憤(ぎふん)にこだわっている。

もも肉をあっというまに片づけ、豚の塩漬け肉を摑んだガレンスが淡々と言った。
「俺はあの少年のことは知らん。だが、王妃のことなら少しは知っている。ましてナシアスさまのすることなら絶対に信じられる」
十も年下の上官に長年忠節を尽くしてきた副官の言葉である。何とも言えない重みがあった。
団長を信じることはそれこそ騎士団員の最低限の心得だ。ジョシュアは若い顔を羞恥に染めて、ガレンスに向かって深々と頭を下げた。
「お許しください。未熟者が差し出がましいことを申しました」
「いいから食え。冷めるぞ」
「は……では、いただきます」
ジョシュアは一つ息を吐くと、湯気を立てている料理に取りかかり、猛然と咀嚼し始めた。

同じ頃、ナシアスも母屋の中で一息ついていた。
卿は公言したとおり、ナシアスを客人としてもてなすつもりらしい。扱いは丁重なものだった。
立派な客間に通されて武装を解き、しばらく休息した後、湯殿へ案内された。
ナシアスの世話はシェラがした。
立ちこめる湯気の中でナシアスが髪を洗うのを手伝い、返り血と共に傷を洗い流した。
「きれいなお体でございますね」
お世辞抜きにシェラは感嘆した。脱いだ戦装束は血だらけだったが、洗ってみると、細かな擦過傷があるだけで、大きな傷は一つもない。
ナシアスは自嘲ぎみに首を振った。
「ガレンスのおかげだ。彼は激しい戦闘のときには私が受けるはずの傷までを一人で引き受けてしまう。それが自分の務めだと言ってね。こんな指揮官のためにそこまでする必要はないといつも言うのだがね。いっこうにやめてくれない」

浅い浴槽に腰を下ろして、ナシアスは深い吐息を洩らしている。シェラは黙って熱い湯を背にかけてやった。

「騎士団はほとんど壊滅。なのに私は彼のおかげで治療を要するほどの傷もない」

恐らく、それこそがガレンスの望みだったはずだ。シェラはそう思った。自分を犠牲にしてもナシアスを無傷で残すことが肝心であると、そうすれば後はナシアスが何とかしてくれると思っている。いや、信じているのだ。

以前の自分ならとても理解できないことだったが、今なら少しわかるような気がする。

自分の場合、その対象は王妃だ。あの人の望みが自分の望みでもある。目的を達成するための駒になれればいいと思う。

いつの間にこんな気持ちになったのか、自分でも不思議だった。かつての宗師に抱いていた忠誠とは少し違う。

あの時は掟と規律にがんじがらめだった。そうするのが当然と教えられ、その通りに動いていただけだった。今は違う。そう言えるだけの自信がある。

「お湯の加減は如何ですか？」

「ああ、ちょうどいい。――これはグラハム卿の趣味なのかな？」

濡れた腕から匂い立つ芳醇な薫りに、ナシアスは首を傾げた。湯の中に、たっぷりと香料が落としてあるのだ。

「雅なことだ。贅沢でもある。硬骨の武人として名高い卿のふるまいにしては意外だが、評判と内実は違うということかな」

容姿や物腰こそ優雅だが、実は質素なビルグナの暮らしに馴染んでいるラモナ騎士団長である。この仰々しいもてなしにいささか眉を顰め、声を潜めて囁いた。

「すまなかったね。君を寵童などにしてしまった」

「いいえ、とんでもない。私のほうこそ、お手数を

お掛けしました」
シェラは素直に礼を述べた。
実際、賢明な処置だった。名目としてはちょうどいい。何よりこの屋敷の人が自分を見る眼はぐっと甘くなる。
「ですが、いっそ私を卿に引き渡してくださってもかまいません。あの方はこの顔にかなりご執心のようでしたから、詳しいことを探れると思います」
ナシアスは小さく笑ってシェラを振り返った。
「そして私は陛下をお守りできなかったことでバルロにこっぴどく叱られるばかりでなく、妃殿下のお怒りまで引き受けなければならないのかな？」
「いえ、決してそういう意味では……。今は陛下の安否を確かめることが第一です。謀反の首謀者なら知っているはずです」
手段を問うている場合ではないと言外に訴えたが、ナシアスはあくまでやんわりと首を振った。
「やめておきなさい。たとえそれが君には何でもないことだとしてもだ。せめて最後の手段に温存しておくんだね。妃殿下はきっとお怒りになる」
「……そうでしょうか」
シェラの声には明らかに力がなくなった。動揺もしていた。
国王の無事を確かめること、その身柄を解放することが王妃の望みであるはずだ。だが、目的遂行のためには王妃を怒らせてもかまわないと言いきれるほど、シェラはまだ強くなかった。
屋敷の小姓がなみなみと湯を満たした桶を運んでくる。ナシアスはそれを断って浴槽から上がった。
水気を拭ったナシアスに、まっさらの布を裁った肌着と立派な着替えが差し出される。真珠色の絹の内着を着た上に、鮮やかな紺に染めた部屋着を重ねたもので、襟と袖には黒い天鵞絨の飾りがつけられ、全体に銀の刺繍が施されている。豪華な部屋着だ。
卿のものにしてはずいぶん若い趣味である。
ナシアスの体にはかなり大きかったので、女達が

呼ばれて、衣裳を着て立ったままの脇や袖を表から縫い上げて、とりあえず体に合わせた。

今度は饗応である。贅を尽くした料理が次々と運ばれてきた。

給仕をしようとして、シェラは一応、どういたしましょうと眼で問いかけた。

今は王妃の従者だが、自分の本来の身分は刺客である。毒物の扱いにも長けている。誰だってそんな者の給仕で食事をしたくはないはずだ。

自分は下がって他の召使いにまかせましょうかと無言で訊いたのだが、ナシアスは黙って空の杯を取り上げてみせた。

シェラも黙って食前酒を注いだ。

ローストした雉、果実や香草の詰め物をした子豚、鳥の肝臓のパイ、ジャムや蜂蜜を添えた冷たい肉など、たった一人のための晩餐にしては贅沢な食事を丁寧に切りわけてきちんと盛りつけた。

シェラは給仕に徹し、ナシアスが食事を終えた後、その食膳を下げた台所で簡単な腹ごしらえをさせてもらった。主人と従者は決して同じ席で飲んだり食べたりしないものなのだ。西離宮とあの王妃だけが例外だった。

台所まで行って戻る間に屋敷のだいたいの構造を頭に叩き込み、人の様子を観察した。部下を見れば上官の人柄が、使用人を見れば主人の人柄がわかる。内装や調度品、掃除の仕方などで、家長の性格もわかる。

グラハム邸は時代を経た建築物だった。がっしりした堅固な石造りは、それこそ内乱が絶えなかった一昔前の時代を反映している。明かり取りの窓は小さく、すきま風を防ぐ工夫はあまりなされていない。

伝統の前には多少の——かなりの不便をも黙って堪え忍ぶべきという信念が窺えた。

贅沢品の類も金のかかった装飾も見あたらないが、掃除は念入りに行き届いている。台所でシェラに食事をさせてくれた中年の料理人も、召使いや女達も、

黙々と動いて自分の仕事を果たしているようだった。
応対は行き届いていて不快な印象は受けないが、滅多に笑顔を見せないからうちとけた感じはしない。
いったいに気むずかしい厳格な雰囲気だった。
これらのことがグラハム卿の人柄を表しているのだとしたら、薔薇の香料と銀で刺繍をした部屋着はまったく似つかわしくない。
部屋へ戻ってくると、シェラはそこに控えていた小姓に細々とした品を頼んだ。水差しや裁縫道具、洗面道具、剃刀、砥石、櫛など、主人の身の回りの世話をするために必要なものだ。
シェラと同い年くらいの小姓はいちいち復唱して引き受けてくれたが、ためらいがちに付け加えた。
「あの、お召し替えの際には女手が必要でしょうから、誰か人をよこしましょうか？」
「いえ。用意さえしてくだされば私がいたします」
針を使うのは本来男の仕事ではないが、こうした特殊な立場にいる少年ならば、主人の衣服の繕いをしてもおかしくない。
やがて小者達がずらりと一列になって、シェラにあてがわれた部屋へやってきた。なみなみと水を満たした大きな水差しを二つと、使った水を捨てる桶、洗面器、手鏡、櫛、剃刀に砥石、裁縫箱、清潔なタオルなどを黙々と並べて丁寧に頭を下げていった。
見事な統制だと、他人事ながら感心する。
届けられた剃刀を確かめてみた。あらためて研ぐ必要もないほど手入れされている。
剃刀を置き、砥石を取り上げた。研がなければいけないものは他にあったのだ。
さっきの身体検査は騎士や兵士相手には有効だが、シェラには意味がない。長靴の革の間、衣服の布の間に極細の針のような刃物を隠してある。
武器と言えばしっかり握れる柄の付いた長剣短剣、もしくは槍や弓矢の類しか知らない兵士に、刺客の使う刃物を見抜けと言っても無理というものだ。
ナシアスが服を脱ぐのを手伝い、屋敷の者達が寝

静まる時間まで待って、シェラはそっと、それらの刃物を取り出して研ぎ始めた。が、たちまち作業を中断する羽目になった。

グラハム卿がナシアスを訪ねてきたのである。

廊下からナシアスの部屋へ行くには、シェラの部屋の前を通らなければならない。

グラハム卿の従者がまずシェラの部屋の戸を叩き、ナシアスさまにお取り次ぎをお願いしますと告げる。

シェラは頷いて自室に引き下がり、廊下ではなく、隣室に続いている扉を通ってナシアスを起こした。

ナシアスは待ちかまえていたように起き出した。

シェラも手際よく着つけを手伝った。

そうして支度が調うと、部屋の扉を中から開けて廊下で待っていた卿を迎え入れる。

生活の道具が持ち込まれたシェラの部屋と違って、客間には寝台と応接用の椅子くらいしか家具がない。

二人はそこに向かい合う形で腰を下ろした。

「お待たせして申し訳ありません」

「いや、こちらこそ夜分に申し訳ない」

卿も部屋着姿だった。ナシアスが身につけているものとはうって変わって地味な色合いである。

身なりだけを見ると、どちらが一家の主だかわからないほどだ。

「こんな時間に押し掛けたのは他でもない。貴君と折り入って話がしたいのだ」

顔つきも口調も真剣そのものである。ごく大事な内密の話をしようというのだろう。自分の従者に目配せして部屋から下がらせた。

これを受けて、ナシアスもシェラに下がるように合図をする。蠟燭の明かりが一つ灯る深夜の部屋で、卿とナシアスは二人きりになった。

「屋敷の者達に何か手抜かりはござらなんだか」

「いいえ。分不相応なまでに歓待していただいております。香料入りの湯浴みも、豪勢な晩餐も、この立派な衣服も、まことに結構です」

いくらか皮肉を込めたナシアスの言葉だったが、

卿は微塵も表情を変えなかった。
「それは、本当なら陛下に着ていただこうと思っていたものだ」
「……」
「いずれ、陛下が我が領地を訪問なさることがあるやもしれぬ。その際、この屋敷に滞在されることがあるやもしれぬ。万が一にももてなしに非礼があってはならぬと思い、用意させたものだ。――まさか貴君に着ていただくことになるとはな」
「グラハム卿」
ナシアスは声に力を込めて、身を乗り出した。
「問わぬつもりでおりましたが、あえてお尋ねする。アルゴートのグラハム家と言えば数ある有力豪族の中でも先祖代々の忠勤を誇り、王国に対する深い忠誠心をもってその名を轟かせていることは我が国の誰もが知っております。あなたはそのお家柄にもご先祖の名にも恥じることのない、稀に見る硬骨の人であり、同時に真の愛国の士でいらした。いや、失礼ながら、あなたの陛下に対する忠誠にはいささかの曇りも濁りもないと、今のお言葉で確信いたしました。そのあなたが何故、いかなる理由によって、ご先祖の名に泥を塗り、ご家名に取り返しのつかぬ傷を付けるような真似をなさいましたか」
「その問いに答える前に、わしも訊きたい。貴君はタウが銀の宝庫であることをご存じか」
初めてナシアスの表情が変化した。
端麗な顔が驚きに染まり、水色の瞳が揺れて疑問の色が浮かぶ。
その表情だけで充分だった。卿は頷き、苦々しい顔になった。
「やはりな、ご存じではない」
「――どういうことでしょう？」
「どうもこうも、ラモナ騎士団長にしてこの扱いだ。貴君は山賊の下に置かれたのだぞ」
そうしてグラハム卿はこれまでの経緯を洗いざらいナシアスに語ったのである。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。